大久保利通とビスマルク

勝　田　政　治

はじめに

「国民文学作家」・「時代批評家」(『日本近現代人名辞典』吉川弘文館，2001年)として，多くの愛読者を持つ歴史小説家司馬遼太郎は，大久保利通とビスマルクの関係について次のように述べている。

> かれ（大久保―勝田）がその滞欧中に日本国家の模範にしようとしたのは国家の統制力のつよいプロシアであり，プロシアを切りまわしているビスマルクであった[1]。
>
> ビスマルクの官邸における招宴でもっとも感動をうけたのは，薩摩の大久保利通と長州の伊藤博文のふたりであった……今後の日本が参考とすべき標本をドイツにみたという熱狂的感想であった。英仏のような大きな植民地をもつ大国はとても参考にならないが，ドイツは植民地もなく，国内の生活文化も質実で，物産の生産量も英仏にくらべれば低く，士民はまだ封建的な実直さを多分に残している。日本といかにも似ているではないか。ドイツ国内のビスマルクへの信任度は高く……大久保はこの「信任」をかちとって日本国改造のすべての権柄をにぎりたいと勃然と志したし，げんにその権柄をにぎるための方向が，帰国後の大久保の動きでもあった。大久保は日本国におけるビスマルクを志したのである[2]。
>
> 大久保はプロシア風の政体をとり入れ，内務省を創設し，内務省のもつ行政警察力を中心として官の絶対的威権を確立しようとした[3]。

大久保利通が1871（明治４）年から1873（明治６）年にかけて，岩倉使節団の副使として欧米視察を行った結果，目標にした政治家はビスマルクであり，将来のモデル国家として設定したのはビスマルクのドイツであり，ドイツ流国家の建設に向かった，という主張である[4]。

こうした大久保とビスマルクのイメージ，すなわち大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は，最近の歴史小説である加来耕三『不敗の宰相　大久保利通』（講談社＋α文庫，1994年）でも以下のように述べられている。

> ビスマルクの演説は，日本の使節たちを感動させずにはおかなかった。かれらはすべからく，プロシアに日本を重ねて聞いたはずである。「日本も今日のプロシアのようになりうる」。この思いが，実は近代日本の進路を決定づけたのだが，使節団のなかでもっとも深く，強く，このイメージを胸に刻みこんだのが，大久保利通であった（317頁）。

大久保はビスマルクの演説に熱狂的な感慨を抱いた。この瞬間，大久保は日本のビスマルクを標榜したといっていい（319頁）。

一般読者の歴史像に大きな影響を与える歴史小説の世界では，大久保とビスマルクは非常に密接な関係でとらえられているのである。そして，こうした歴史小説の描写の背景には，当然歴史研究の成果が存在するはずである。本稿の課題の一点目は，大久保＝ビスマルク（ドイツ）像が歴史研究において，どのように形成・確立され，さらには修正されてきたのかを検証することである。二点目は，大久保＝ビスマルク（ドイツ）像の当否を，史料にそくして検討することである。そして，最後に大久保が目標にしたもの，モデル国家として打ち出したものについての私見を提示する(5)。

1　大久保＝ビスマルク（ドイツ）像の形成・確立・修正

1　明治・大正・昭和戦前期（1910～1938年）の研究―形成期―

大久保研究が本格的に開始されるのは，始めての伝記である勝田孫彌『大久保利通伝』（上・中・下巻）が同文館から刊行された，1910～11（明治43～44）年以降である。同書は，後に維新史料編纂会の編纂官を務めた歴史家勝田孫彌が，大久保の日記や書簡を初めて史料として用い，実証主義を貫いて著した大部な評伝である(6)。その『大久保利通伝』（下巻）は，次のように記している。

> ビスマルクは岩倉，利通，木戸，伊藤，山口を其邸に招待を供し，別室に於て，普国が千難萬障を凌ぎて今日の盛況に至りし歴史を語り，又深く列強の依頼すべからずして，自強自衛の必要なる所以を詳述したり……之れビスマルクが，獨逸聯邦の大宰相として欧州に雄視せし時にして，今や東洋振興国の政治家岩倉，利通，木戸等の諸雄と一堂の内に相会す，また千古の偉観と称すべきなり（52・54頁）。

1873（明治６）年３月15日に大久保らがビスマルクの招宴に参加し，そこでビスマルクの演説を聞いた事実を淡々と記し，「千古の偉観」であるとしか述べていない。明治末期に刊行された『大久保利通伝』は，大久保がビスマルクを目標にしたとか，ドイツをモデルとしたなどとは記述していないのである。

『大久保利通伝』が刊行されるとジャーナリスト池辺三山は，1911（明治44）年９月に「大久保利通論」を『中央公論』に発表している。そこで池辺は，「ビスマークとの話は伝記の中にも出ている。さすがビスマークだ。思い切ったことをいっている……ちょっとなんとか言ってやりたいところでしょうが，これに対し大久保がどういう話をしたか分らない」(7)，と述べている。ビスマルク演説に興味を示しながらも，大久保との関係を特別なものとしてとらえているわけではない。明治末期に初めて登場した大久保論は，ビスマルクとの関係を決して重視していなかったのである。

大正期にはみられなかった大久保論が，昭和期に入るといくつか登場する。そして，そこでビスマルクとの関係が注目されることになる。まず，徳富蘇峰であ

る。徳富は，1927（昭和２）年に『大久保甲東先生』（民友社）を刊行し，「ビスマーク公は，随分勝手な手前味噌を塗り立てた。されど此の談話は，恐らくは大久保公や，岩倉公にも，多大の印象を残したものであろう」（140頁），とビスマルク演説が大久保に与えた影響を推測し，演説後の西郷隆盛・吉井友実宛大久保書簡を紹介し，「頗る独逸―普魯西―に傾斜したる趣が伝へられてゐる」（159頁），とドイツへの「傾斜」を指摘している。大久保とビスマルク・ドイツの関係に初めて着目した著作として注目される。そして，ビスマルクとの関係をさらに強調したのが三宅雪嶺であった。三宅は，1928（昭和３）年に発表した「同時代観」（『我観』第54号）で次のように述べている。

> 大使等が人物に親炙して刺戟を被れるはビスマルクに優れるは無し。新勝国を背景にし，容貌魁偉，一見して其の英傑たるを知る。皆な各々感服せる中，大久保が特に暗示を得たり……新興国なる獨逸帝国にビスマルクが鉄腕を揮ふを目撃し，新たに国家を経営するは彼の如くならざるべからずと頷く[8]。

こうして，三宅雪嶺によって大久保とビスマルクは固く結びつけられたのである。大久保＝ビスマルク（ドイツ）像の成立である。しかし，発表した雑誌『我観』は「目立たぬ雑誌」であったため「余り知られていなかった」ことからか[9]，それは昭和戦前期において必ずしも支配的ではなかった。例えば，1938（昭和13）年に刊行された田中惣五郎『大久保利通』（千倉書房）は，「欧州の大政治家」としてビスマルクとともにフランス大統領ティエールをあげ，両名の「健闘ぶりを羨んで居ます。それは，やがて，大久保の今後の人間修養の方向でもあるのでせう」（375頁），あるいは「ビスマークを任じ，チエールを任ずる大久保」（391頁），とビスマルクを決して絶対的な存在とはみなしていない。

2　昭和戦後期の研究（1946～1969年）―確立期―

1920年代後半に登場した大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は，戦後歴史学のなかで確立されることになる。それは，明治維新＝絶対主義成立ととらえる，いわゆる講座派理論が背景となっていた。戦後いちはやく，大久保論を発表したのが服部之総である。服部は1946年の「維新史のしっぽ―大久保時代―」で，「絶対主義政治家としての大久保のビスマルクにたいする重さ……幕末維新の実践場裡に彫琢された彼の政治家的直観ははやくもドイツが日本の手本たるべき事態を洞察していた……大久保は，ビスマルクとその国家から鼓舞されて帰ったのである」[10]，と記している。服部の主張は，大久保とビスマルクの課題はともに国民的規模における統一国家の実現にあった，という世界史上の観点からなされている。そして，ビスマルクが「外見的立憲制の粉飾」において実現したものを，大久保は「古典的絶対主義の裸姿において実現したままである」[11]，と大久保が日本における絶対主義を成立させたものとして論じている。絶対主義論から大久保とビスマルクとの関係を提示したのであるが，大久保は「ビスマルクをたよりとしなかったばかりでなく，そのまねもしなかった」[12]，と述べるように両者を直

接結びつけたわけではない。

講座派の立場から戦後の明治維新史研究をリードし，多くの影響を与えたのが遠山茂樹である。遠山は1964年に「大久保利通」を発表し，次のように述べている。「大久保はイギリスでは各地の工場を視察，「英国の富強をなす所以」を知った。とくにドイツでは，首相ビスマルク……演説は，一行（岩倉使節団—勝田）にふかい感銘をあたえた。すでに大久保は，岩倉あての書翰にも，ビスマルクが，もっぱら兵力と財力とに頼ってフランスに勝利をおさめたことに教訓をえたと言い送っているが，今まのあたりにこの「大先生」の勢威のさかんなさまを見，プロシアにたいし「自ら思を嘱候心持に御座候」と西郷・吉井友実に感激を伝えている」(13)。岩倉使節団の欧米視察に関してイギリスとドイツを取り上げ，とくにビスマルク・ドイツとの関係を強調しているのである。

服部・遠山の言説を受けるかたちで，大久保＝ビスマルク（ドイツ）像を確立させたのが毛利敏彦であった。毛利は1969年，戦後初めての大久保の評伝である『大久保利通』（中公新書）を刊行し，次のように述べている。

> 彼（大久保—勝田）は，みずからビスマルクたらんとし，プロシア王とビスマルクとの関係を，明治天皇と自分との関係における理想としたのであろう（171頁）。
>
> 大久保が，日本の模範と考えたのは，アメリカやイギリス，フランスではなかった……ヨーロッパの後進国ドイツ，ロシアにつよい関心を寄せた（177頁）。
>
> 幕末以来の自己の実践体験にプロシアの歴史を重ね合わせて理解し，大ドイツ帝国の現状に日本の前途の希望を見出した。大久保は，万国対峙のもと日本の独立を確保する唯一の道は，ドイツを手本に，強力な政府のもとで富国強兵，殖産興業をやりぬくことだと，かたく心に期したにちがいない（178頁）。

大久保は「みずからビスマルク」となろうとし，「日本の模範」としてロシアとともにドイツを設定し，「ドイツを手本」として国家建設に邁進しようと「心に期した」，という主張である。こうして1960年代末の毛利『大久保利通』によって，大久保とビスマルク・ドイツは直接結びつけられるようになった。1960年代は，講座派明治維新論（絶対主義論）の全盛期であった。

「はじめに」で紹介した司馬遼太郎が『翔ぶが如く』を『毎日新聞』紙上に発表し始めたのは，毛利『大久保利通』が刊行された後の1972年からである。その後も石井寛治『体系　日本の歴史12　開国と維新』（小学館，1989年）が，「ドイツでは，宰相ビスマルクと会見したとき……大きな衝撃をうけた。日本もプロシアが小国から大国へと発展したコースをたどらねばならぬ，との思いが大久保・木戸・伊藤らの胸中に刻みこまれたにちがいない。出発前からドイツ皇帝ウィルヘルム一世とビスマルクとの関係を聞き，日本のビスマルクたらんとひそかに志していた大久保は，とりわけふかい感動をこの演説からうけたようである」（215

頁）と記している。そして，最近の立岩寧『大久保利通と安積開拓』（青史出版，2004年）も，「大久保は新政府の外務卿（ママ）（大蔵卿の誤り―勝田）として米欧視察団に加わりヨーロッパ諸国を視察したとき，遅れて資本主義が発達したプロシアやロシアは，日本にとっては参考になることが多いとして特に関心を示し，ロシアは途中帰国したので見ていないが，プロシア国では，国権を伸張するためプロシア王と宰相ビスマルクが一体となって奔走していることに感銘を受け，明治天皇と自分との関係について思いをはせている……イギリスやフランスの議会制度は日本の国情に合わないとして，プロシアに範を取り，当面は立憲君主制の下で規律ある政府をつくろうと意図している」（211頁）と述べている。大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は，現在でも繰り返されているのである。

3　1970年代以降の研究―修正期―

大久保＝ビスマルク（ドイツ）像を修正する研究が現れてくるのは，1970年代―講座派理論に対して大きな疑問が投げかけられてきた時期―に入ってからである。そして，それは殖産興業政策研究や岩倉使節団研究のなかから登場することになる。

石塚裕道『日本資本主義成立史研究』（吉川弘文館，1973年）は，岩倉使節団の関心が集中したのはイギリスとドイツであったとし，「あるべき明治国家像の枠組構築に必要な素材として，イギリス資本主義に「富国」，ドイツ軍国主義に「強兵」のモデルが求められていたことは否定できない」（88頁），とドイツとともにイギリスも「モデル」とされたと述べている。そして，大久保は「十九世紀後半の海運帝国でしかも先進資本主義国……イギリスを「規模（ママ）」（規範の誤り―勝田）とすべきことを力説」し，「明治政府が推進する殖産興業政策は……イギリスに日本を近接させるための緊急課題の一つとして，参議内務卿大久保の富強構想のなかに位置づけられていた」（97頁），と大久保殖産興業政策はイギリスモデルであると言う。モデル国家としてドイツのみならず，イギリスも浮上することになった。

岩倉使節団の本格的研究に最も早く着手した田中彰は，1977年に『岩倉使節団』（講談社現代新書）を刊行し，『米欧回覧実記』の記述はドイツ一辺倒ではない，として次のように述べる。明治10年代における岩倉具視・伊藤博文・井上毅らの「プロシアを下敷きにした近代天皇制国家形成のプラン」から，逆に岩倉使節団を「日本とプロシア」，木戸・大久保とビスマルク・モルトケとを「大きく二重写し」にし，使節団の関心が当初から「プロシアを「特別の国」として「特別視」していた，と解することは慎みたい」，使節団は「相対的にプロシアに共感と親近感をもった」のである（140～141頁）。

大久保＝ビスマルク（ドイツ）像に修正を迫る主張ではあるが，大久保政権の「選んだ選択肢」は「相対的に共感と親近感を抱いていた小国から大国へのプロシアの道だったのである」（193頁）と述べているように，大久保＝ビスマルク

（ドイツ）像を否定するものではなかった（田中はその後，この説を修正する―後述―）。

ドイツとともにイギリスをもモデルとする見解は，1979年の佐々木克「文明開化の政治指導―大久保利通を中心に―」（林屋辰三郎編『文明開化の研究』岩波書店）にもみられる。同論文は，次のように言う。大久保は，欧米視察で「相対的にではあったけれども，日本の生きるべき姿のモデルを振興統一帝国ドイツに見い出し得」て（87頁），「プロシアの歩いた道を日本において再演すべく，意欲をたぎらせて日本の土を踏んだ」（89頁）。そして，帰国後の大久保殖産興業政策の「めざすところ」は，「〈文明開化〉の国へと成長させることであった……達成されるべき目標となる国は，ドイツでもフランスでもなく，イギリスの富強なる国であった」（104頁）。大久保は「イギリスの富強をビスマルクの論理で達成しようとしていた」（110頁）。

こうした主張は，最近の佐々木克『大久保利通と明治維新』（吉川弘文館，1998年）でも変わってない。大久保は「日本の国家目標として，統一ドイツを選ぼうとしていたようにみえる。しかしそれはたんにドイツを模倣することではなかった。大久保の胸中にはもうひとつ先の目標としてイギリスが描かれている。この二つの目標を結びつけるもの，それはイギリスの富強をドイツ・ビスマルクの政治力で達成することであった」（163頁），とドイツとイギリスという「二つの目標」をより明確に打ち出している。

モデル国からドイツを消し去り，イギリスを強調したのが，1995年の飛鳥井雅道「明治天皇・「皇帝」と「天子」のあいだ」（西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化受容』新曜社）である（飛鳥井は，1984年の「「国民」の創出」〈飛鳥井雅道編『国民文化の形成』筑摩書房〉ですでにイギリスを指摘していたが，未だ本格的には展開していなかった）。同論文は，「イギリスの条件が日本に似ていると考えた」大久保は，殖産興業政策のみならず憲法構想においてもイギリスを「理念型として描いていた」（55～56頁）と主張する。そして，「大久保を専制主義者，絶対主義論者と単純に捉え」（55頁）て，「プロイセン型を志向していた」（78～79頁）とする通説を批判し，大久保が「イギリスをモデルとしたことにまったく疑いはない」（63頁）と明言する。大久保＝イギリス像の登場である。

イギリスをモデルとすることは，最近の田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店，2002年）も主張している。田中は前述のように，いち早く大久保＝ビスマルク（ドイツ）像に疑問を呈していたが，同書で大久保の憲法構想は，「木戸孝允のプロシア・モデル構想に対して，イギリスの君主制を念頭においていたから，通説とはちがってイギリス・モデルとしての可能性が大きかった」とし，「アジアにおけるプロシアの道を選んだ」のは，明治一四年の政変後の「岩倉＝伊藤ライン」であると述べる（269～270頁）。大久保はイギリスがモデルであり，ドイツへの傾斜は大久保死後の伊藤・岩倉政権からであるとする。

大久保＝ビスマルク（ドイツ）像の否定論が提出される一方，イギリスをモデルとしつつもドイツを実質的目標とする論も依然見られる。最近の室山義正『松方正義』（ミネルヴァ書房，2005年）は次のように言う。「大久保路線は，経済的保護誘導（積極政策）と政治的保守主義（立憲君主制）を組み合わせて，イギリスのような経済的に強大な島帝国の建設を目指したものであった」が，「大久保の富国強兵構想は，イギリスを外形的目標とし，ドイツを実質的目標とした」ものである（73～74頁）。

2　大久保のビスマルクに関する言及

大久保＝ビスマルク（ドイツ）像に対して，最近有力な疑問が寄せられていることが確認できたが，ここでその当否を改めて検討していくことにする。『大久保利通文書』全10巻所収の書簡・意見書・覚書などを調べると，大久保がビスマルクに直接言及している史料は，5点の書簡しか存在しない。それらを年代順に掲げ，内容をみていこう。

1　欧米視察前

大久保が初めてビスマルクの名前を記したのが，次の①書簡である。版籍奉還によって府藩県三治体制を制度的に確立し，その実体化による中央集権化に向けて「藩制」を制定し，藩への統制強化に乗り出そうとしていた時期である。

①1870（明治3）年9月7日付岩倉具視宛書簡(14)

この書簡には，次の二か所にわたってビスマルクの言及がある。

〔1〕今般調練　天覧奉願候趣意四藩徴兵……練兵之精粗　御覧相成候得ハ一体兵隊之励み合ニ相成候事ハ不及申即今内外之形勢を以論シ候ても約り国之興廃は兵力ニ有之事勿論ニ而只々急務は兵事ニ有之……非常之恩を示され候て兵気を鼓舞いたし候得は藩ニ帰り候ても　天恩之難有を忘却不仕……藩ある事ヲわすれて朝廷之兵たらん事を願い候様之人心ニ可相向……古今英雄之所為恩ヲ与へ親を取るを主といたし即今海外を以テ論し候てもヒスマロクなとも只々兵事と会計とのミ大事に相勤候由今般大勝利を得候も兵気を得候丈之事ニ可有之誠ニ此にハ御注目なくんハあるへからす畢竟皇国之盛衰ニ大関係仕候事

薩長土肥「四藩」からの「徴兵」（召集兵）による，東京（皇居）守衛常備兵への「天覧」を岩倉に要求した一節である。ここで大久保は，次のように言っている。国家の「興廃」は「兵力」によることから，軍事力の強化が「急務」である。未だ政府の直属軍隊が存在しない状況下，東京守衛のために召集された4藩兵への「天覧」は，兵隊の「励み合」になる。そして，「天覧」による「恩」を示して「兵気」を「鼓舞」すれば，藩を忘れて「朝廷の兵」（天皇の軍隊）としての意識を持たせることができる。古今，「英雄」は「恩」を与えて「親」をとることを主としている。ヨーロッパではプロシアのビスマルクが「兵事」と「会

計」を「大事」にしているが，普仏戦争の勝利は巨額な軍事予算に基づく強兵策による，「兵気」がもたらしたものである。この「兵気」には「注目」せざるを得ない。日本の「盛衰」に「大関係」するからである。

軍事力の重要性から，普仏戦争に勝利したプロシアのビスマルクに注目しているのは事実である。しかし，ここから軍事大国化の道を指摘することはできない。大久保の関心は，中央集権化に向けて藩兵を天皇の軍隊とすることにある。その観点からプロシアの「兵気」に着目し，それは日本にも大いに参考になるとして，「天覧」によって「兵気」を鼓舞し天皇の軍隊化をはかる必要性を訴えているのである。なお「天覧」は，同年9月8日に行われたが，風雨のために中止された。

〔2〕大久保一翁へ御面会之事過刻粗申上候通是も　御趣意感銘御辞退も得不申上様に御仕向専要に奉存候……古より明主之人を用る千里を遠しとせすして親切ニ相求めし類不少孛王ハヒスマロクと常に車ヲ同ふし大事ある時は自ら迎に参候由是等は国体も違ひ同日之論にハ無御坐候得共畢竟君職之重を任し候誠意之厚き処は同し道理と相考申候願くは　閣下御駕を抂させられ候而懇々御趣旨を御示し傍ら思食を以御弁論被下候ハヽ実ニ意外ニ感動可仕ハ必然と奉存候

旧幕臣で当時静岡藩権大参事である大久保一翁（忠寛）を参議に登用するため，病気を理由として固辞する一翁に対し，岩倉自ら説得にあたることを求めた一節である。大久保は，ここで次のように言っている。古来，「明主」は「人」を登用するにあたって，「親切」な対応を行っている。プロシア王が「大事」な時，自らビスマルクを迎えに行くのはその例である。こうした「誠意」は「国体」が違っていても，「君職」にあるものは同じ「道理」と考えられる。そこで，岩倉も一翁のもとへ「御駕を抂させられ」て，「懇々」と「御趣旨」を示していただきたい。

岩倉に大久保一翁への働きかけを促すために大久保は，プロシア王とビスマルクとの関係を例として持ち出しているにすぎない。この記述を前掲の毛利『大久保利通』は，「プロシア王とビスマルクとの関係を，明治天皇と自分（大久保利通―勝田）との関係における理想とした」（171頁）と述べているが，このように解釈することは困難であろう。なお，大久保一翁は政府への出仕を拒否している。

2　欧米視察中

岩倉使節団の副使として欧米視察中に大久保は，次の三通の書簡にビスマルクの名前を記している。ビスマルクとの会見前の一通と会見後の二通である。岩倉使節団は1871（明治4）年11月12日に横浜を発ち，最初の訪問国アメリカのサンフランシスコに着いたのは12月6日である。そして，アメリカのボストンから次の訪問国イギリスへ向けて発ったのが，翌1872（明治5）年7月3日，イギリスのロンドンに着いたのが7月14日である。ロンドンで最初に書いたのが，次の②書簡である。

②1872（明治５）年７月19日（陽暦８月22日）付西郷隆盛・吉井友実宛書簡[15]

洋九月普国伯林におひて魯帝墺帝会議之筈ニ候由何も未実地不相分候得共魯外務卿「ゴルチャコフ」も随従ニ而参ル様子宇内に名誉なるビスマーク等之大先生会議之事に候得ハ何事ならんと諸人騒き居る様子也ビスマーク之勢益盛んニ候諸方より伺候贈進門前車馬之声不絶同人へ面会致したる者は面目ニ相成候程之事ニ被聞候

来る９月に予定されているベルリンでのドイツ・ロシア・オーストリアの３皇帝会談に関し，ビスマルクの評判を「宇内に名誉なる」とし，彼の威勢はますます「盛ん」であり，各地から面会に訪れる「車馬」の「声」が絶えないと記している。初めてヨーロッパに足を踏み入れた大久保が，ビスマルクの現地での評価の高さに驚嘆している様子がうかがわれる。

イギリスからフランスのパリへ着いたのが，11月16日である。パリからの書簡にはビスマルクの名前はないが，ドイツ（プロシア）に触れた1873（明治６）年１月27日付西徳二郎宛書簡がある。そこには，次のように記されている

英米仏等ハ普ク取調モ出来居候而已ナラス開化登ルコト数層ニシテ及ハサルコト萬々ナリ依テ孛魯ノ国ニハ必ス標準タルヘキコト多カラント愚考イタシ候ニ付別而両国ノコトヲ注目イタシ候[16]。

大久保は，視察を終えたイギリス・アメリカ・フランスなどは「開化登ルコト数層」であって，とても及ぶことはできない。そこで，これから訪ねる予定であるプロシア（ドイツ）とロシアが「標準」となり得るであろうと考え「注目」している。この記述によれば，大久保がドイツに強い関心を持ち，モデル国家として設定しようとしたことは確かである。しかし，このことから直ちに大久保がドイツをモデル国家とした，と断定するのは早計である。先進資本主義国家に圧倒されたショックから，まだ見ぬ後発国であるドイツやロシアに「注目」せざるを得ない，と言っているだけである。

フランスのパリを２月17日に発った大久保は，ベルギーとオランダを経て３月９日，「標準」となるであろうと考えたドイツのベルリンに着いた。３月11日にドイツ皇帝に謁見し，翌12日にビスマルクおよびモルトケと会見した。そして，15日にビスマルクの招宴に臨んで有名な演説を聞いた後，次の③・④書簡で直接ビスマルクとドイツに言及している。最も重要な書簡である。

③1873（明治６）年３月21日付西郷隆盛・吉井友実宛書簡[17]

当国（ドイツ―勝田）ハ他之欧州各国とハ大ニ相異ナリ淳朴之風有之殊ニ有名之「ヒスマロク」「モロトケ」等之大先生輩出自ラ思ヲ属候心持ニ御坐候已前ニ当政府之事モ種々風説モ有之候得共実地ヲ目撃候得ハ相違之廉不少候殊ニ「ヒスマロク」ハ益信任セラレ何モ此人之方寸ニ出サルナシト被察候……益陸軍ニ力ヲ用ヒ候赴ニ相見得申候凡而仏ノ償金ヲ費シ候間此上一層ノ強国ト相成可申候陸軍調練も一見イタシ候……少人数ニテ候得共其整厳不堪感伏候

④1873（明治６年）３月27日付西徳二郎宛書簡[18]

当国（ドイツ―勝田）之処ハ欧州中ニテ全風俗人質モ相替リ少シク淳朴ノ趣有之各国ノ内ニテ相近キモノ可有之と存候乍去逗留モ十分ナラス日々交際上ニテ寸隙モナク其真味ハ嚙得不申候ヒスマロク・モロトケ等之大先生ニ面会シタル丈ケカ益トモ可申歟

強い関心を持って訪れた大久保のドイツに対する第一印象は，ヨーロッパ諸国のなかでは「風俗人質」が異なり「淳朴」であり，日本と近いものがあるということであった。そして，「大先生」であるビスマルクやモルトケを生んだドイツに「思ヲ属候心持」であると吐露する。ビスマルクはますます信任され，国策はすべて彼の「方寸」（心）から出ているようである。ドイツは，ますます陸軍に力を注ぎ，このうえ一層の「強国」となるであろう。陸軍の調練も見学したが，その「整厳」さには「感伏」した。

ドイツに親近感を抱いたのは事実である。しかし，④書簡の滞在期間が短いうえに「交際」に忙殺され，ドイツの「真味」は「嚙得不申候」であった，という記述は重視されなければならない。すなわち，大久保はドイツを十分に調査し，その「真味」を理解できたわけではなかった。したがって，ドイツに向かう前には「標準」となるであろうと言っていたが，「標準」とすべき具体的な内容についてドイツでは何も語らずに，ビスマルクとの面会だけが「益」であったとしか記さないのである。

3　欧米視察後

ビスマルクの招宴に出席した後，三条太政大臣からの帰国要請により，大久保は「標準」と考えていたロシアを訪ねることはできず，３月28日に使節団一行と別れて帰国の途につく。帰国後に大久保は，征韓論政変を経て政府の実権を掌握し，多方面にわたる政策を展開するようになるが，そこでビスマルクに言及しているのは，次の⑤書簡のみである。

⑤1875（明治８）年３月23日付税所篤宛書簡[19]

色々之事少々見込相変候とて青筋を立テ異論なと致候ハ誠ニ白面書生之所為にして既往ヲ追考候得ハ後悔萬々ニ候只今之日本にてナポレオンビスマルク百出候而も外ニ致様あるものニ無之即今之人傑とか何とか申候而も何れも五十歩百歩之差ある而已ニ而誰の彼のと申程之事ハ決而無之此節始而悟道致申候未日本之前途悠遠ニ而成人之上善悪は相分可申小児之戯れ候内は決而定論之出来候ものニ無之と愚考仕候ずるいとか何とか名も付可申候得共今十年致候得は明瞭可致候也

政府の強化に向けて，下野していた木戸孝允と板垣退助の政府復帰をはかった大阪会議により，両名が参議に復職したのが1875年の３月である。そして，大久保・木戸・板垣の合意により，伊藤博文を含めた４名が３月17日に立憲政体取調委員となり，調査が進められていた時期に書かれた書簡である。なお，大阪会議

は妥協の産物であり，その後急進論を主張する板垣と大久保・木戸の間で対立が深まり，7ヵ月後の10月27日に板垣は左大臣島津久光とともに辞職することになる。

大久保は，ここで次のように言っている。板垣の急進論などに対し「見込」が違うからといって，「青筋を立テ異論」を主張するのは「白面書生」の所為であり，「後悔」するだけである。現状では，「ナポレオンビスマルク」が「百出」してもどうすることもできない。日本の前途は「悠遠」であり，「成人」になれば「善悪」ははっきりする。「小児」が戯れている間は「定論」など無理である。「異論」を主張しないことは「ずるい」と言われるかもしれないが，もう10年も経てば「明瞭」となろう。

大久保は後日（1875年12月5日），佐佐木高行との会談で大阪会議後の改革問題に関する自己の立場を語っている。この書簡の内容を理解するうえで，有用な史料となるので引用しておこう。

> 今度ノ御改革ヨリ人撰等モ木戸・板垣ノ専ラ任ズル処ニテ，実ハ利通モ不満ノ廉モ不少ナレ共，一口発議スレバ大ニ差障リモ有之コトニテ，忍ンデ黙居致シ来レリ，是レ全ク曲従ニアラズ，如此スレバ天下萬分ノ御為メト，兼テ覚悟致シタル事ナリ，就テハ，利通ハ因循ニナリタリ馬鹿ト変ジタリト，外議モ往々耳ニ触レタル事ナレ共，敢テ不顧処ニテ是レ迄参リタル事ナリ(20)

大久保は，「不満」があったけれども「発議」すれば「差障リ」があることから，「天下」のために忍んで「黙居」していたのであり，これはかねてからの「覚悟」であった。そのため，「因循」になったとか「馬鹿」じゃないかとか言われたが，無視していたようである。

大阪会議後の政府内対立を解消して統一することは，ビスマルクやナポレオンであっても困難である，と税所篤に報じているのである。ビスマルクの名前を挙げているが，ナポレオンと同様に強力政治家の例としてあげているにすぎない。

大久保がビスマルクに言及した史料は，以上の5点である。確かに大久保は，ドイツを訪ねる前にはビスマルクに多大なる関心を持っていた。そして，ビスマルクと直接会った時は感銘を受け，ドイツに親近感を抱いたのも事実である。ここまでは，従来の大久保＝ビスマルク（ドイツ）像に異論はない。しかし，帰国後に政府の実権を掌握して自らの政策を実行する段階では，ビスマルクやドイツを特別視するような史料は存在しない。ビスマルクを目標として，モデル国家としてドイツを設定して諸政策を推進した，という大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は論証できないのである。

3　大久保のめざしたもの

大久保が政府の実権掌握後，モデル国家としてその名を書きとめている文書として，次の二つが挙げられる。いずれもよく知られているが，必要な部分を引用しておこう。

1　1873（明治６）年11月「立憲政体に関する意見書」(21)

民主固トヨリ適用スヘカラス君主モ亦タ固守スヘカラス我国ノ土地風俗人情時勢ニ随テ我カ政体ヲ立ツル宜シク定律国法以テ之レカ目的ヲ定ムヘキナリ英国ハ欧州ノ一島国ナリ……国威ノ海外ニ振ヒ萬邦ヲ膝下ニ制シ今日ノ隆盛ニ至ル者ハ蓋シ三千二百余萬ノ民各己レノ権利ヲ達センガ為メ其国ノ自主ヲ謀カリ其君長モ亦人民ノ才力ヲ通暢セシムルノ良政アルヲ以テナリ我日本帝国モ亦亜細亜州ノ一島国……其英国ノ隆盛ニ至ラサル者ハ他ナシ三千一百余萬ノ民愛君憂国ノ志アル者萬分有一ニシテ其政体ニ於テモ才力ヲ束縛シ権利ヲ抑制スルノ弊アルヲ以ナリ其国家ヲ負担スルノ人力ト其人力ヲ愛養スルノ政体ニ従テ国家ノ以テ隆替スル所ロノモノ昭々此ノ如シ……定律国法ハ即ハチ君民共治ノ制ニシテ上ミ君権ヲ定メ下モ民権ヲ限リ至公至正君民得テ私スヘカラズ……此体（君民共治―勝田）一タビ確立スル時ハ則ハチ百官有司擅マヽニ臆断ヲ以テ事務ヲ処セズ施行スル所ロ一轍ノ準拠アリテ変化換散ノ患ナク民力政権并馳シテ開化虚行セズ此レ建国ノ植幹為政ノ本源ニシテ今日百般ノ務メニ従事スル着々茲ニ注意セズンバアル可カラザルナリ

大久保は，政治形態として民主政治の「適用」を拒み，君主政治も「固守」すべきものではないとし，日本の「土地風俗人情時勢」に随っての「定律国法」による政体，すなわち「君民共治」が理想であると言う。そして，この「君民共治」を理想とする背景にモデル国家としてのイギリスが登場している。

日本と同じ「一島国」で面積と人口もほぼ同じイギリスが，「国威」を海外に振るい「萬邦」を膝下に制して，今日の「隆盛」に至ったのは何故か。それは，人民が各自の権利を達するために国家の自主を謀り，君主もまた人民の「才力」を「通暢」させる「良政」を行ったからである。すなわち，国家を負担する「人力」と「人力」を「愛養」する政体であるかどうかが，国家の隆替を決するのである。そして，この政体こそイギリスの「君民共治」なのである。

なお，この意見書では「民主ノ政」の具体的な国名として，「合州国」（アメリカ合衆国）・「瑞西蘭土」（スイス）の他に「南亞墨理駕地方」（南アメリカ地方）を挙げているにすぎなく，「君主ノ政」の具体的な国名は見られない。前掲の室山義正『松方正義』は，同意見書を紹介して「イギリス型の民主政治はとらず，プロイセン型の立憲君主制度を採るべきである」とし，「プロイセンの政治システムをイメージしたもの」と述べている（73頁）。しかし，イギリスを「民主ノ政」とはしておらず，プロイセン（ドイツ）の政体に関する言及は全くなされていない。

こうして理想の政治形態として，イギリスモデルの「君民共治」（立憲君主制）を主張した大久保は，次いで民間産業重視の殖産興業論を打ち出してくる。

2　1874（明治７）年５月頃「殖産興業に関する建議書」(22)

大凡国ノ強弱ハ人民ノ貧富ニ由リ人民ノ貧富ハ物産ノ多寡ニ係ル而テ物産ノ多寡ハ人民ノ工業ヲ勉励スルト否サルトニ胚胎スト雖モ其源頭ヲ尋ルニ未タ嘗テ政府高官ノ誘導奨励ノ力ニ依ラサル無シ

建議の冒頭部分である。大久保は，国家の富強の根源に「人民ノ工業」を見出し，「人民ノ工業」を伸ばすのは政府の誘導奨励によらなければならないと言う。そして，次のように続ける。

国家人民ノ為メニ其責任アル者ハ……工業物産ノ利ヨリ水陸運輸ノ便ニ至ルマテ総シテ人民保護ノ緊要ニ属スルモノハ宜シク国ノ風土習俗ニ応シ民ノ性情智識ニ従ツテ其方法ヲ制定シ之ヲ以テ今日行政上ノ根軸ト為シ其既ニ開成スルモノハ之ヲ保持シ未タ就緒ナラサルモノハ之ヲ誘導セサル可ラス乃チ傍例ヲ按スルニ英国ノ如キハ僅々タル一小国ノミ然レトモ島嶼ノ地ヲ占メ港湾ノ便ヲ得テ其国鉱物ニ富ム故ニ彼ノ政府高官ハ此ノ天然ノ利ニ基キ之ヲ補修シテ盛大ノ域ニ到ラシムルヲ以テ義務ノ至大ナル者トシ其君臣相倶ニ意ヲ茲ニ用ヒテ宇内運漕ノ利ヲ占有シ大ニ国内ノ工業ヲ振起セント欲シ奮然トシテ前古殊別ノ航海法ヲ制定セリ……国民ヲシテ航海ノ術ニ熟練セシムル……内国ノ工業ヲ保護シ之ヲ昌盛ナラシムル……船舶大ニ増加シ随ッテ海運ノ術益長シテ……爾来工業ノ程度愈盛大ヲ極メテ国内ノ産物之ヲ人民ニ給シテ余リアリ是ニ於テ初メテ其禁令ヲ解キ貿易ノ自由ヲ許セリ是レ英国今日ノ富強ヲ致ス所以ノ源由ナリ……必シモ英国ノ事業ニ拘泥シテ之ヲ模倣ス可キニアラスト雖モ君臣一致シ其国天然ノ利ニ基キ財用ヲ盛大ニシテ国家ノ根抵ヲ固フスルノ偉績ニ至リテハ我国今日大有為ノ秋ニ際シテ宜シク規範ト為スヘキナリ況ヤ我邦ノ地形及天然ノ利ハ英国ト相類似スルモノアルニ於テオヤ

「人民ノ工業」を保護育成するためには，日本の「風土習俗」に応じ人民の「性情智識」にしたがって，「方法」を制定して誘導しなければならない。そして，その「方法」の「傍例」としてイギリスを挙げる。イギリスは「一小国」であるけれど，政府が「天然ノ利」に基づいて盛大の域に引き上げることを「義務」として，海運業に着目して国内の工業を振起させようとして「航海法」（1651年の航海条例）を制定した。同法の保護政策によって海運業が伸び，さらに工業が盛大となったところで自由貿易に転換したのが，イギリスの「富強」の「原由」である。必ずしもイギリスの事業に「拘泥」して「模倣」すべきではないが，「天然ノ利」に基づいて「財用」を盛大にして国家の「根抵」を固くした「偉績」は，我国「大有為」の時に際して宜しく「規範」とすべきである。まして，我国の「地形」や「天然ノ利」は，イギリスに類似しているのであるから。

殖産興業を推進するにあたって目標に設定したのが，保護主義を経て自由主義となって今日の「富強」を成し遂げたイギリスの勧業政策であった。日本の現状を勘案すれば，民業を「誘導勧誘」する保護政策をとらなければならないが，それはイギリスのような「富強」にいたる一階梯なのだ，という主張である。

このように大久保は，「君民共治」というイギリス流立憲政治を「良政」とし，イギリスの工業化を「規範」とすべきである，と明言しているのである。欧米視察後にモデル国家として，打ち出されたのはイギリスである。少なくとも，ドイツをモデルとすべきであるという史料は存在しない。

なお，最近刊行された安島良『内務卿大久保利通評伝』（東京書籍，2005年）は，「大久保は単にビスマルクに心酔したのでも，彼一辺倒でもなく」て「わが国情に相応しい政策を創造しようとしていた」（20頁）とし，モデル国家について次のように述べている。「大久保は米欧使節として，国情も近似するオランダ・ベルギーなどの小国の政治体制を模範と考えていた」（183頁）。オランダ・ベルギーという初めての指摘であるが，論拠となる史料は提示されていない。

おわりに

大久保は1870（明治３）年，普仏戦争でプロシアを勝利に導いたビスマルク（プロシア）の軍事力に注目した。そして，岩倉使節団の副使として1872（明治５）年にイギリスに渡った時，ヨーロッパにおけるビスマルクの勢威の大きさに驚嘆し大いなる関心を寄せた。翌1873（明治６）年のフランスでは，ロシアとともにドイツを「標準」とすべきであると考え，ドイツではビスマルクの絶対的な政治力を直接確認し，ますますドイツに親近感を抱いた。大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は，この時期までの大久保の心情を正確に表現していると言えよう。

岩倉使節団の欧米視察から帰国し，征韓論政変を経て政府の実権を掌握した大久保が，ビスマルク（ドイツ）を模範とした諸政策を実行しようとしたならば，大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は成立する。しかし，この時期になるとビスマルクやドイツは，大久保関係史料から姿を消してしまう。大久保＝ビスマルク（ドイツ）像は，最も重要な時期である大久保政権期では当を得なくなるのである。

大久保政権期の主たる関心の対象としては，それまでのドイツに替わって「島国」イギリスが登場するようになる。欧米視察中はドイツの「淳朴ノ趣」に親近感を覚えたが，帰国後はイギリスの「地形」や「天然ノ利」に日本との類似性を見出したのである。大久保が欧米視察後に日本の国情を勘案してめざしたものは，ドイツではなくイギリスをモデルとする近代化であった。しかし，それは将来に達成すべき目標としたものであり，現実主義者大久保が採用した政策そのものを意味するわけではない。

本稿は，大久保＝ビスマルク（ドイツ）像の当否を課題としたため，大久保とイギリスの関係の究明，大久保政権の政策分析などは稿を改めて論じることとする。

注

（１） 司馬遼太郎『翔ぶが如く』（一）（文春文庫，1980年），63頁。『翔ぶが如く』の初出

は，『毎日新聞』1972年1月～1976年9月である。その後，文芸春秋より単行本（全7巻）が1975年から翌76年にかけて刊行され，1980年に同社より文庫版（全10巻）が刊行された。ここでは，文庫版より引用する。

（2） 同前，236～237頁。

（3） 司馬遼太郎『翔ぶが如く』（二）（文春文庫，1980年），37頁。

（4） これらの記述の他に司馬は，大久保が「ドイツへ行ったとき，高名な国家学者シュタインをその別荘にたずねて講義を聴くにおよんで，かれの内務省設立は信念のようなものになった……大久保はシュタインの言葉を天啓のごとく考え」た（『翔ぶが如く』（一），74～75頁）と述べているが，明らかな事実誤認である。これは，『大久保利通文書』五（207～209頁）に収められている「青木周蔵談話」の誤読によるものと思われる。大久保は，ドイツでシュタインには会っていない。シュタインから大きな影響を受けたのは，1882（明治15）年に憲法調査のため訪独した伊藤博文である（瀧井一博『文明史のなかの明治憲法』講談社選書メチエ，2003年）。

（5） 筆者は，すでに拙著『〈政事家〉大久保利通』（講談社選書メチエ，2003年）で大久保＝ビスマルク（ドイツ）像を批判し，大久保がめざしたのはイギリスモデルの近代化であったことを主張している。しかし，同書は一般書という性格から史料分析を割愛し，結論部分のみ提示したものとなっている。本稿は，拙著上梓後の新たな知見も加えて，より詳細に論証しようとするものである。

（6）『大久保利通伝』（上・中・下巻）は，2004年にマツノ書店から復刻されたが，その復刻版下巻の巻末に拙稿「『大久保利通伝』を推薦する」が収められている。同書の史学史上の意義を簡潔に記しているので，参照していただきたい。

（7） 池辺三山の「大久保利通論」は，翌1912（明治45）年に新潮社から池辺三山『明治維新　三大政治家　大久保・岩倉・伊藤論』として刊行された。ここでの引用は，同書の再刊である中公文庫版（1975年）から行っている（59頁）。

（8） 三宅雪嶺『同時代史』第一巻（岩波書店，1949年），340頁。『同時代史』全6巻は，1926（大正15）年1月から1945（昭和20）年12月までの『我観』・『東大陸』・『我観』（第2次）に連載された「同時代観」を，三宅の死後に刊行したものである。本論で引用した「明治六年」の部分は，1928（昭和3）年4月の『我観』第54号に掲載されたものである（遠山茂樹「三宅雪嶺著『同時代史』について」〈『遠山茂樹著作集』第八巻，岩波書店，1992年〉，257頁）。

（9） 佐藤能丸『異彩の学者山脈』（芙蓉書房出版，1997年），35頁。

（10） 服部之総「維新史のしっぽ―大久保時代―」（『日本評論』1946年11月号）。ここでの引用は，『服部之総全集10　絶対主義の史的展開』（福村出版，1974年）から行っている（226・228頁）。

（11）・（12） 同前，242・228頁。

（13） 遠山茂樹「大久保利通」（遠山茂樹編『近代日本の政治家』講談社，1964年）。ここでの引用は，『遠山茂樹著作集』第二巻（岩波書店，1992年）から行っている（337頁）。

（14）『大久保利通文書』四，12～16頁。

（15） 同前，433～435頁。

（16） 同前，484頁。

（17） 同前，492～493頁。

(18) 同前，500～501頁。

(19) 『大久保利通文書』六，294頁。

(20) 『保古飛呂比　佐佐木高行日記』六，336頁。

(21) 『大久保利通文書』五，182～203頁。原本は，国会図書館憲政資料室蔵「伊藤博文文書」(書簡の部　503)。ここでの引用は，『大久保利通文書』五から行っているが，同書は誤記や脱落が散見されるので，原本と照合して訂正している。

(22) 『大久保利通文書』五，561～565頁。

〔付記〕

本稿は，2005年5月14日の大久保甲東祭執行協賛会主催「大久保甲東公　没後百二十七年祭・生誕百七十五年　記念講演会」(霞会館) で行った，講演 (「大久保利通とビスマルク―大久保のめざしたもの―」) の原稿に加筆したものである。貴重な講演の機会を与えて下さった，大久保利恭氏にお礼申し上げます。

(考古・日本史学専攻：教授)

九九